慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	原始基督教と社会問題（上）
Sub Title	
Author	高橋, 誠一郎
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1923
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.17, No.5 (1923. 5) ,p.673(1)- 685(13)
JaLC DOI	10.14991/001.19230501-0001
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19230501-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

エ・トルラア作
黑田禮二譯

表現派戲曲轉變

獨逸表現派の奇才エルンスト・トルラアは革命的な情熱と豐かな詩想を持つ天才である。歐洲大戰が齎した慘苦を痛感した彼が戰爭を呪ひ、軍國主義を否定して、自由と平和と世界同胞の理想に燃ゆる社會革命劇がこの戲曲「轉變」である。表現派の代表戲曲として全歐洲に謳はれたこの傑作は黑田氏の麗筆によつて邦譯され、美裝を凝して出た。表現派の藝術を知らんとする者の必讀の好著である。

最新刊
菊半裁 神定價 送料十二錢
新裁 泰原一圓三十錢

獨逸在
黑田禮二著

獨逸革命史記

新しい革命獨逸の苦悶と憂欝と希望とをこのやうに生々と描き得た通信は世に現はれてゐない。表面的な政治的事實に捕はれたり、數字を無意味に羅列したり、新しいことでも價値のない事實を徒らに並べて得意がつてゐるのとは違つて、著者の深刻な社會心理的觀察と流麗な藝術家的取扱ひとを以て紹介された獨逸は懷しく生動してゐる。「解放」誌上に連載して潮の如き歡迎を受けた本書は出た。

最新刊
背裁 菊半 神定價 送料
クロース裁 新 原一圓九十錢
裝幀 高雅 泰 製 上製 菊半 二十錢

東京大阪 今川小路 神田三河 休橋南詰 大鐙閣
振替 東京大阪 三三六一 七二五五
電話 東京大阪 九段南 八一〇三

三田學會雜誌　第十七卷　第五號

論說

原始基督教と社會問題（上）

高橋誠一郎

一

「我れ又た夜の異象の中に觀てありけるに、人の子の如き者雲に乘りて來り、日の老いたる者の許に到りたれば、即ち其の前に導きけるに、之れに權と榮と國とを賜ひて諸民、諸族、諸音をして之れに事へしむ、其の權は永遠の權にして移り去らず、又た其の國は亡ぶることなし。」「然れど終には至高者の聖徒、國を受け、長久に其の國を保ちて世々限りなからん。」「而して國と權と天下の國々の勢力とは皆な至高者

の聖徒たる民に歸せん、主高者の國は永遠の國なり、諸國の者皆な彼れに事へ且つ順はん」。（「但以理書」第七章第十三、十四、十八、二十七節）。活ける人々の活ける嚮導であつた古い預言の精神が現在社會と其の要求とを拋棄して、只管將來に於ける釋放と贖罪と救濟とのみを念とするに至つたことは戒律主義が過度の發達を來したる時代の特色であつた。（「三田學會雜誌」第十七卷第三號所載拙稿「エッセネ敎團の共產主義」參照）。初期マカビウス時代より初まる「但似理書」に於てすら其の凝視する所は常に將來である、而してそは公義に對する訓戒を行ふ場合に於てすら現在に於ける正しき生活の價値より觀察せずして、遠く現世的實現の領域を越えて將來に於ける聖徒の王國を期待してゐる。更らに是れよりも後の「エノク」「バルク」及び「以士喇（エズラ）」の默示錄に至つては現實性と生命とを缺くことが更らに大である。「エノク書」の一部の筆者は曩きに揭げたる「人の子」なる辭句を繼承して、之れを明確に人格を具せるメッシャ（mashiach）に適用する。（「エノク書」第四十六章第一―四節、第四十八章第二節及び第七十二章に至る諸章）。彼れはメッシャを以て日と星との創造に先立ちて指定せられ、此の世界が造らるゝ以前に、神によつて選ばれ秘せられたる人間以上のものと觀る。彼れは完全なる正義であり、其の力は永遠より永遠に及ぶ（同第四十五―四十九章）。又た神が聖善の精神を通じて（πνεύματι ἁγίῳ）强大に、悟性の勸告を經て賢明ならしめたる救世主（χρεστὸς κύριος）たる國王の描寫は「ソロモンの詩篇」中に看出される。（同第十七章）。

赫奕たる來世の奇蹟的、天啓的、超自然的性質は猶太の凡ゆる階級の豫期に共通なるものであつた。而も猶太人の間に於ける別個の階級によつて抱有せられたる救世主に關する觀念の間には極めて明確なる區別が存して居つた。羅馬時代に於ける猶太の僧侶は其の役德餘祿によつて富を獲、奢侈に耽つて、其の高貴なる地位の精神的要求に對して殆んど何等の興味をも有して居らなかつた、（J. S. Riggs, History of the Jewish People, 1900, p. 227.）。イスラエルの復興は大部分、富裕階級の事業であつた。是れ等の人々は猶太敎の債務を支拂へるものとも稱し得やう。軈て上流階級は自己を以て猶太敎會の所有者と看做すに至つた。猶太人の間には常に富裕階級と司祭階級とを同一視して之れを一般庶民階級に對立せしめんとするの傾向があつた。彼れ等は薄荷、茴香、馬芹及び總べての野菜の十分の一

を取り納めて律法の最も重き義と仁と信とを棄てた。（「馬太傳」第二十三章第二十三節「路加傳」第十一章第四十二節）。彼れ等は長き衣服を着て歩行し、市上に於ける人の挨拶、會堂の高坐、筵席の上座を好み、又た嫠婦の家を併呑し、僞つて長き祈を行つた。（「馬可傳」第十二章第三十八―四十節）。社會問題は猶太教會によつて排斥せられた。固より社會問題其れ自體が廢止せられたのではないが、而もそは最早搦囚以前に有したるが如き積極的、創造的地位を宗教生活中に占むることがなくなつた。斯くの如きはイスラエルの宗教が既に創設せられたるに起因する。是に至つて預言は最早批評以外に何等の行ふ可きものもなかつたが爲めである。斯くて又た預言の聲が聞えなくなり、司祭の地位が確固と爲るに伴れて、社會問題は排斥せられたのであつた。司祭、有司及び一般富裕階級は外國の權力によつてユダの支配せらるゝことに反對した。外人に對する多額の納稅は彼れ等が其の國土から搾取し得る高を減少した。彼れ等は是れが爲めに理論上に於ては外國の羈絆を脱することに贊して居つた。而も愼重なる彼れ等は釋放を神の干渉に委せんことを欲した。彼れ等は一般民衆に比して良好なる事情の下に在つたが爲めに、彼れ等よりも克く「神に隨從する」ことが出來た。救世主の時代に關し、又た救世主其の人に關する彼れ等の觀念は理論に於ては政治的であつたが、實際に於ては現實に此の世界を支配せる權力に對する愼重なる和解によつて宥和せられて居つた。メッシャの時代に關する上流階級の觀念は下の如き章句中に看出される。「外人は立ちて汝等の群れを飼ひ、異邦人は汝等の畑を耕す者と爲り、葡萄を作る者と爲らん。されど汝等はエホバの祭司と稱へられ、我れ等の神の役者（つかへびと）と呼ばれ、諸々の國の富を喰ひ、彼れ等の榮を得て自ら誇る可し」。（「以賽亞書」第六十一章第五―六節）。（Louis Wallis, Sociological-Study of the Bible, 2nd. ed., 1913, pp. 217, 218, 221, 222.）。

他方に於て猶太の下層階級も亦た超自然的黄金時代を求めたのであるが、救世主の時代に對する彼れ等の觀念は上流階級のそれと著しく相異して居つた。即ち彼れ等は嘗だに外人の支配より釋放せらるゝことを欲したるのみならず、アモス其の他の大預言者の精神に從つて猶太の上流階級の支配よりも亦た等しく釋放せられんことを願つた。下層階級の觀念は下の章句中に表明せらる。「エッサ

イの株より一つの芽出で、其の根より一つの枝生えて實を結ばん。其の上にエホバの靈停らん。是れ智慧聰明の靈、謀略才能の靈、知識の靈、エホバを畏るゝの靈なり。彼れはエホバを畏るゝをもて歡樂とし、又た目睹る所によつて審判を爲さず、耳聞く所によつて斷定を爲さず。正義をもて貧しき者を裁き、公平をもて國の內の卑しき者の爲めに斷定を爲し、其の口の杖をもて國を打ち、其の口唇の氣息をもて惡人を殺す可し」。（同第十一章第一—四節）。「我が扶くる我が僕、我が心歡ぶ我が選人を見よ、我れ我が靈を彼れに與へたり、彼れ異邦人に道を示す可し。彼れは叫ぶことなく、聲を擧ぐることなく、其の聲を街頭に聞えしめず。又た傷める蘆を折ることなく、ほの暗き燈火を消すことなく、眞理をもて道を示さん。彼れは衰へず喪膽せずして道を地に立て終らん。諸々の島は其の法言を待ち望む可し」。（同第四十二章第一—四節）。

猶太民族の希臘時代に於ては律法（Torah）は富裕なる司祭と外國の抑壓者とに對する叛起の記號であつた。而も猶太人がスリヤの軍隊を破つてユダス・マカビウスの下に政治的獨立を贏ち得たるの事實は即ち司祭政治の確立と爲つて、軈が

て民衆の利害と一致を缺くに至つた。猶太が羅馬の版圖に歸して復たも其の獨立を失つた時、其の人民は救世主の降臨を長く待つこと能はざるの狀態に陷つた。メッシヤは直ちに出現して此の世界を支配せなければならぬと云ふ思想が鞏固と爲つた。聖母が神惠を得て男子を孕めることを知れる時、彼の女の言へる言は當時猶太に漲れる情操を表示するものである。曰く「夫れ權能を持ち給へる者我れに大なる事を成せり、其の名は聖く、其の矜恤は世々彼れを畏るゝ者に及ばん。其の臂の力を發して心の驕れる者を散し、權柄ある者を位より下し、賤しき者を擧げ、飢えたる者を美食に飽かせ、富める者を徒しく返らせ給ふ」と。（路加傳第一章第四十九—五十三節）。

二

北パレスチナなるナザレの手工業者にしてダビデの直系なるヨセフの子イエスは斯くの如き革命の前徵に滿てる雰圍氣中に生を享けた。當時猶太に於ける救世主に對する一般の期待は精神的ではなかつた。惡魔がイエスを試みて、汝若し神の子ならば命じて此の石をパンと爲よ」と云ひ、又た彼れを聖京の神殿の頂上

に立たせて「汝若し神の子ならば、己が身を下へ投げよ、そは汝が爲めに神、其の使等に命ぜん、彼れ等手にて支へ、汝が足の石に觸れざるやうにす可しと錄されたり」と言へるは恐らく希臘人が智慧を覓むるが如くに休徴を乞ふ猶太人がメッシヤよりして一樣に之れを求むるの事實を物語るものではあるまいか。（「馬太傳」第四章第三、五、六節）。而して最後に惡魔が彼れを高山の頂上に誘ひ、世界の諸國と其の榮華とを下瞰せしめて、「汝若し俯伏して我れを拜せば、是れ等を皆な汝に與ふ可し」と云へるものは更らに明確に一般の意想を表明せるものである。（同第八、九節）

イエスが安息日に會堂に入つて聖書を讀まんとして立ちたる時、彼れは「以賽亞書」を展いて左の章句を看出した。「主の靈我れに在す。故に、貧しき者に福音を宣べ傳へん事を我れに膏を沃ぎて任じ、心の傷める者を醫し、又た囚人に釋さん事と瞽者に見させん事を示し、又た壓制へらるゝ者を縱ち、主の禧年を宣べ播めんが爲めに我れを遣せり」。イエスは書を捲きて其の係員に與へて坐した。會堂に在る者は皆な目を注めて之れを視た。（「路加傳」第四章第十七―二十節）。彼れは「知慧も齡も彌增り」神と人とに益々愛せられた。彼れの同志は彼れに於て驚かて羅馬人に對する其の釋放運動を指揮す可き者の一人を認めた。彼れ等は彼れ等が計畫しつゝある謀反に對して彼れの助力を得ることに努めた。或ひはイエスも初めよりして此の誘惑に對して全然無關心なるを得ざるものであつたかも知れない。而も彼れは次第に別個の思想傾向を取るに至つた。人はパンのみに生くるものに非ず、唯だ神の口より出づる總べての言葉に因ると錄されてゐる。吾人は主たる吾人の神を試む可きものでない。「主たる汝の神を拜し惟だ之れのみに事ふ可しと錄されたり」。（「馬太傳」第四章第四、七、十節）彼れはサタンを退くるが如くに革命主義者及び國民主義者の誘惑に打ち勝つたのである。

踰越の節に赴かんとしつゝある民衆がガリラヤの湖の東岸なる荒野に坐せるイエスを圍繞し、彼れを立てゝ王と爲し、都に向つて進まんとしたる時、彼れは衆人を歸さんとて其の弟子を强ひて船に乘せて對岸に渡らしめ、獨り密かに祈禱せんとて山に登り、日暮れて猶ほ此處に止まつた。（「約翰傳」第六章第十五、十六節、「馬太傳」第十四章第二十二、二十三節）。イエスは信仰と愛との莊嚴なる理想主義を以て、劍を投げ棄て、手を擴げ、胸を開いて不正の掩壘に向つて進んだ。彼れは雷だに人間

の暴力を否認せるのみならず、一般の希望が天帝より期待せる威力をすら排斥した。彼れは彼れの生命を救ふが爲めにも、又た惡人を殺害して王國を打ち建つるが爲めにも十二軍團の天使を召集することを拒んだ。

三

基督の說ける福音は其の本體に於ても形態に於ても極めて單純である。其の要旨はバプテスマのヨハネの說ける其れであつた。即ちイエスが初めて道を宣傳せる時、其の說ける言葉は「天國は近けり、悔ひ改めよ」と云へるものであつた。（同第十七節）。基督敎運動はバプテスマのヨハネを以て始まる。ヨハネ自身もイエスを以て自己の事業を續行し成就す可き者と解して居つた。イエスはヨハネの粗笨なる勇氣と力とを稱揚し、新たなる宗敎的紀元はヨハネと共に奮鬪と激動の時代として開始せられたることを主張する。「バプテスマのヨハネの時より今に至るまで人々勵みて天國を取らんとす、勵みたる者は之れを取れり。夫れ總べての預言者と律法の預言したるはヨハネの時までなれはなり」。（「馬太傳」第十一章第十二、三節、「路加傳」第十六章第十六節）。イエスと民衆とは彼れ等がヨハネに於て古預言者の精神の權化を有することを感じた。彼れは古預言者と等しく倫理的恭順を要求した。彼れ及び其の弟子は斷食を行ひ、（「馬太傳」第九章第十四節、第十一章第十八節）彼れは彼れ等に一定形態の祈禱を敎へたのであるが（「路加傳」第十一章第一節）、而も記錄に殘れる彼れの人民に對する敎旨中には宗敎上の慣習的儀式、增加せる安息日の遵守、更らに嚴格なる洗淨及び犧牲若しくは日常の勤行に關する一言をも發見することがない。彼れは單に改悛と惡行よりの脫却とを說く。彼れはバプテスマを受けんとて來れるパリサイ及びサドカイの人々に向つて「蝮の裔よ、誰が汝に來らんとする怒を避く可きことを告げしや」と叫んだ。（「馬太傳」第三章第七節）。彼れは猶太人の自恃と其の系統及び宗敎的獨占の自負を破壞した。彼れは言ふ、「汝等我れ等が先祖にアブラハムありと云ふことを意ふ勿れ。我れ汝等に告げん、神は能く此の石をもアブラハムの子と爲らしめ給ふなり」と。（同第九節）。神は惡を去る可き人々を求めて、自餘一切のものを破却せんとする。「今や斧を樹の根に置かる。故に總べて善果を結ばざる樹は斫られて火に投げ入れらる可し」。（同第十節）。即ちヨハネは審判を以て始まる可き救世主の活動を期待し

た。是れを免る可き餘裕は殆んど存しなかつた。然しながら彼れより後に來り、彼れに勝りて力あり、彼れは其の履を提るにも足らざるイエスは毫も斯くの如き救世主の必要を感じなかつた。彼れは次第を顚倒した。審判は最後に來るものであつて、最初に到るものではない。先づ苗を生じ、次いで穗出で、而して後、穀粒成熟し、最後に收穫の時到るのである。現在の行爲を喚起する唯一の任務は種蒔くことである。（「馬可傳」第四章第二十六、二十八節、「馬太傳」第十三章の比喩參照）。（Walter Rauschenbusch, Christianity and the Social Crisis, 1910, p. 58.）。

神の國は顯れ來るものではない。「此處に視よ、彼處に視よと人の言ふ可き者にも非ず。夫れ神の國は汝等の裏に在り」。（「路加傳」第十七章第二十、二十一節）。神の國は神の意志が遵奉せらるゝ總べての範圍である。斯くて天上は神の國に屬する。斯くて又た地上も神の意志が此處に遵奉せらるゝ範圍に於て神の國に屬する。而して神の意志に服從する凡ゆる人の心胸は神の國に屬する。神の國は總べての人が神の意志を行はんとするに至りたる時、彼れに到るものである。イエスは言ふ「若し我れ神の靈に由りて鬼を逐ひ出しゝならば、神の國は最早汝等に至れり」。（「馬太傳」第十二章第二十八節）。「我れ洵に汝等に告げん、若し改まりて嬰兒の如くならずば天國に入ることを得じ」。（同第十八章第三節）。イエスの凡ゆる教旨と其の凡ゆる思惟とは此の神の國の希望を中心とするものである。彼れの倫理的教旨は此の中心點より觀て、初めて其の眞の意義を知ることが出來る。